

しあわせ

11 月 号



愚^ぐがなかの極^{ごく}愚^ぐ、
 狂^{きやう}がなかの極^{ごく}狂^{きやう}、
 塵^{じん}禿^{とく}の有^う情^{じやう}、
 底^{てい}下^げの最^{さい}澄^{ちやう}。

(最澄『願文』)



「手を合わす母」

深まりゆく秋。私が子供の頃は秋と言えば実りの秋。特に庭先にカキの木が実をみのらせる光景が町内いたるところに見られた。

食料が充分でなかった時代、柿をはじめクリなど木の実は子供たちにとって絶好のおやつだった。輪にした縄に渋柿を吊るして干し柿にする光景はどこの家にもあった。まさに秋は「実りの秋」だった。稲刈りも炊き込みご飯を田んぼに運んで、あぜ道に蓆（むしろ）を敷き、その上で食べたのもピクニック気分が味わえて楽しかった。

水は井戸から手押しポンプで、ご飯もお風呂もかまどや風呂釜で山から拾ってきた薪で炊いた。

当時もお金は必要だったに違いないが、最小限のお買い物ですんでいた。支払いもつけで、月に一度、中には半年、あるいは年末に。

信じられないほどの信頼関係にあった地域社会も今は懐かしい思い出となってしまった。

法座案内

法味の会「ご和讃のこころ」

十一月 十九日 午前十時

法話 住職

報恩講法要

十二月 十二日(日) 昼席

十三日(月) 朝席・昼席

講師 内藤 知康和上

(本願寺派勸学)

※本堂内は常時換気しておりますが、参拝の際は、検温・マスク着用をお願い致します。

府中町山田二丁目一五十三
 栢原山 龍仙寺
 電話(〇八二二八)一四八二



名は体をあらわす。比叡山延暦寺を開かれた伝教大師最澄(767-822)は、まやしくその名の通り、いかなるごまかしも自身に許さない、鮮烈な生き方を貫かれた方でした。今回は最澄のことばを味わってみましょう。

伝教大師は七十六年に滋賀に誕生され、二十才のとき東大寺で正式な僧侶となられました。しかし、すでに俗化していた南都をはなれて故郷の比叡山へ登り、みずから誓願を建てられます。その「願文」のなかには、あまりにきびしい自己への眼差しがみられます。

愚がなかの極愚、狂がなかの極狂、

塵禿の有情、底下の最澄。(願文)

愚者のなかの愚者の極まり、狂人のなかの狂人の極まり、塵あくたのような名ばかりの僧侶、底下の凡夫、それがわたし最澄です…。自らの全存在を「偽物」と言いきるような大師の言葉に、私たちはたじろいでしまいます。

「なぜそんなに自分を卑下するのですか？」

以前、大学の講義でこの法語を紹介したとき、学生さんから質問をいただきました。たしかに苛烈ともいえる大師のことばには、そのような思いを抱く方も少なくないでしょう。ことに主体性、自己実現、自己肯定感などの言葉があふれる現代社会では、しっかりと自己をもつことが重視されますので、自らを極愚・塵禿・底下とする大師の言葉は理解しがたいでしょう。しかし、この大師の愚悪の告白は、はたして自己反省の言葉だったのでしょいか。山口の福田康正先生は著書のなかで、次のように書かれています。

「反省する自分も、される自分も、同じ自己」中心の自分なのです。必ず自分をかばう心が動き、ごまかします。他者の目、自分にはどうにもごまかすことのできない、他なるものの目をいただく以外、人間は本当に自己を知ることのできないのでしょい。」

わたしたちは、自らの拙さを省み、自らの愚かさを恥じ、ときには自らを責めるでしょう。しかし、それが自己反省である限り、必ずどこかにごまかしがあるのでしょい。反省する自分も、我執にとらわれた凡夫だからです。

あき 明らけく 後の仏の御世までも

光りつたへよ 法のともしび (最澄)

はるか五十六億七千万年後に世に現れ、お釈迦さまの跡継ぎとして仏となられる弥勒菩薩。その弥勒仏が出現されるそのときまで、この光を、法のともしびを伝えつづけよ…。比叡山へ登られた大師は、自刻の薬師如来像のまえに、不滅の法灯を捧げられています。自らを「極愚」「塵禿」「底下」とされた大師の言葉は、自己反省ではありませんでした。それは、けっしてごまかすことのできない仏さまのまなざしに遇い、仏法というまことの光を仰がれている姿に他なりませんでした。

夜のあいだはまったく気づかなかったけれども、お昼間にお日さまのひかりが差し込むと、驚くほど、それこそ息を吸うのもためらわれるほど室内にほこりが舞っていた。そんなことがありますね。桐溪順忍和上は、

「お照らしが強いほど、この身の塵や埃がよく見える。自分が正しいと思っっているあいだは、良心は昼寝をしているのではないか。」

と言われています。自らのすべてを偽物とされた伝教大師は、仏のまなざしという本物の光を仰ぎつづけられた方でした。その精神はおよそ四〇〇年の時を超えて、親鸞さまの「愚禿」という名のりのなかに受け継がれていきました。今年には伝教大師の二二〇〇年大遠忌に当ります。大師のかかげられた不滅の法灯はいまも比叡山に灯りつづけられており、親鸞さまに受け継がれたその精神は、お念仏の声となって私たちに届いています。ともにお念仏を、仏の光を仰がせていただきますしよい。」